

時には雲底温度に応じて J_w は若干増加する。

低高度の場合は、夏季でも τ_a が高く、 J_a が小さいために、 J_w は冬型に近い分布型となる。高高度の場合は、 τ_a が低下し、 J_a は増加するが、IRT 周辺の気温および湿度がともに低いために J_w は夏・冬ともへ型の分布型になる。

海面温度の走査角依存性について、気象モデルを用いて検討し、夏季と冬季の温度分布の相異が主として海面と IRT との間の大気放射と吸収に起因することを確認した。また水平線付近においては、IRT 近傍の気温に近い値を示すことを指摘した。

文 献

Bell, E.E., L. Eisner, J. Young and R.A. Oetjen,

1960: Spectral Radiance of Sky and Terrain at Wavelengths between 1 and 20 Microns, J. Opt. Soc. Am., 50, 1313-1318.

Hudson, R.D., 1969: Infrared System Engineering, Wiley, 142-156.

増谷光正, 1974: Remote Sensing, キャノン, 256-257; ほか.

松井松長, 宮武将浩, 高木 亨, 1974: 油汚染水面の見かけの放射温度について, 天気, 21, 307-310.

高木 亨, 松井松長, 1967: 中間赤外域における背景放射の分光分布, 分光研究, 16, 112-118.



岡田安彦訳著

寒極シベリア — 極限の記銀—

世紀社, B 6 版, 273頁, 1,800円

地球上で観測された最低気温の記録は、久しくベルホヤンスクが保持してきた、今日では南極のポストーク基地の -88.3°C に王座を譲ったとは言え、寒極という言葉から多くの人々に連想されるのはシベリアのベルホヤンスクであろう。

しかしその低温の記録が -67°C という数字は知っていても、白雪に蔽われた原野を想像する域を出ない、わが国ではこれまでその寒さの実態も、この低温記録の観測の経緯も紹介されていないからである。

本書の内容は二つに分れる、前半は毎日新聞の記者である著者が、1966年1月にベルホヤンスクを訪れ、 -62°C という寒さを身をもって体験したルポルタージュ“寒極その極寒に生きる”で、100頁ほどの紙面の中 -50°C 、以下の寒さと、そこに住む人々の生活を、読

者があたかも自分自身の眼で見、体験しているような錯覚に陥るほど巧みに紹介されている。後半はレニングラードの水理気象出版所から刊行された、ニコライ・ヤコブレッチ・フィリポビッチ著 寒極——ヴェルホヤンスク測候所とその歴史——の全訳である。

わが国の気象庁は今年が創立百年になるが、シベリアのさいはての地ベルホヤンスクでは、流刑囚であったイヴァン・アレクサンドロウィッチ・フジャコフによってはじめて気象観測が行なわれてから、1969年が100年目にあたる。(測候所が設けられたのは1883年で以後連続して定常観測が続けられている。)政治犯としてシベリアに送られ、極寒の地で14箇月にわたって気象観測を行ない後年測候所開設の基礎を作ったフジャコフの観測、その後の気象観測の変遷、その当時のシベリアの状況、天気俚諺など興味深い事実が数多く書かれているが、気象学ないしは気候学的にみても、1885年1月15日に -67.8°C という低温記録が作られた点について(従来わが国では同年2月5日とされていた。)の記述や、ベルホヤンスクやオイミヤコンの気候誌など貴重な記述が多い。

内容は読物として面白いだけでなく、学問的にも気象庁倉嶋厚博士が監修されていて価値が高い。

(河村 武)